■ 海外情報 ■

建築家エルンスト・マイ(Ernst May)の生涯と作品(その4)

お茶の水女子大学名誉教授　田中　辰明

はじめに

建築家エルンスト・マイの生涯と作品その1を本誌2015年2月号に、その2を2015年3月号、その3を2015年7月号に報告した。

エルンスト・マイ(Ernst May, 1886-1970)は1925～1930年の間にフランクフルトで「新フランクフルト運動"Neue Frankfurt"」を起こし多くの労働者階級を対象としたジードルングを建設した。既報のようにニーダーラッド(Niederrad)のジグザグ集合住宅(図1)が代表作といってよいであろう。本報ではマイが1929～1930年にかけて建設したヴェストハウゼン(Westhausen)のジードルングを紹介する。このジードルングは第二次世界大戦後、我が国も含めて多くの団地つくりの模範となった。筆者は2015年10月6日にこのジードルングの調査を行った。

図1　エルンスト・マイ設計のニーダーラッドのジグザグ住宅

写真1　"ヴェストハウゼン"ジードルングの最寄り駅地下鉄6号線、シュテファン・ハイゼ通り駅(Stephan-Heise-Straße)

1. ヴェストハウゼン(Westhausen)のジードルング

マイは1930年10月5日にソ連から招待を受けモスクワへ出発している。1926年2月にはフランクフルトでナチ学生団体も組織され、フランクフルト大学でユダヤ人学生に対する排斥運動が始まっている。母親がユダヤ人であったマイは台頭してきたナチスを敬遠してモスクワへ向かったのである。したがってこの作品はマイの新フランクフルト運動の最後の作品ということになる。政権交代が頻繁に行われたヴァイマール共和国時代のドイツは経済状態が不安定であった。1929年10月24日にニューヨークで株式の大暴落が起きた。米国での株式大暴落により、米国資本がドイツから引き上げるようになり、ドイツ経済は急速に崩壊をはじめ失業者が街にあふれた。そして深刻な財政難に見舞われた。フランクフルト市の財政も非常に厳しくなった。ユダヤ人市長ランドマン[註1)]もナチスによる攻撃を受け厳しい舵取りを強いられた。このような非常に厳しい状況の中で作られたのがヴェストハウゼン(Westhausen)のジードルングである。このジードルングには地下鉄6号線に乗車し、シュテファン・ハイゼ通り駅(Stephan-Heise-Straße)(写真1)で下車すると、すぐ目の前に広がっている。団地に面する大道路はエルンスト・マイを支援した社会党の市長の名、ルドヴィック・ランドマン通り(Ludwig Landmann Str.)と命名されている(写真2)。この道には団地を設計したエルンスト・マイを紹介する銘板(写真3)もあった。銘板には「エルンスト・マイ1886～1970、1925～1930年フランクフルト市の建築部長。フランクフルトに社会主義住宅団地を建設したパイオニア。氏が建築部長を務めた間にこのヴェストハウゼン

写真２　ジードルングに沿った大道路は当時の社会党の市長を記念しルドヴィック・ランドマン通り(Ludwig Landmann Str.)と命名されている

写真３　住宅団地には設計者エルンスト・マイの銘板がある。

ジードルングは建設された」と記されている。

このジードルングの発注者は小規模住宅㈱(Aktiengesellschaft für kleine Wohnungen(ABG))とナスアウイシェ・ハイムシュテッテ(Nassauische Heimstätte)という組織で前者が426戸の住宅を、後者が690戸の住宅を発注し建設した。1532戸の住宅が計画されたが、実際に施工されたのは1116戸であった。その内216戸は３室の住宅で、延べ床面積47㎡、中央式暖房、給湯、簡易浴室、フランクフルト厨房[註2)]が設備されていた。また864戸は２室と1／2室からなり、延べ床面積は40～42㎡であった。２世帯住宅の集合住宅であった。暖炉による暖房が行われ、小規模なフランクフルト厨房が付き、浴室があった。また36戸は３室と1／2室からなり、延べ床面積は54㎡であった。暖炉による暖房が行われ、浴室とフランクフルト厨房が設備されていた。工期は２期に分かれ、１期工事は1929年から1930年にABG社分が、1930年から1931年に２期工事が行われ、これはナスアウイシェ・ハイムシュテッテ(Nassauische Heimstätte)の分であった。ABG社が資金不足に陥り、後半の建設をナスアウイシェ・ハイムシュテッテ(Nassauische Heimstätte)が引き受けたものである。フランクフルト方式のコンクリートパネル工法とレンガ積み工法の両方で施工された。施工はフィリップ・ホルツマン社が担当した。

１－１　敷地計画

敷地図を図２に示す。この図にある“U6“は地下鉄の６号線シュテファン・ハイゼ通り駅を示す。ほぼ矩形の敷地である。およそ670m×360mの敷地で、約24.1haの面積である。南北に９棟の住棟が並び、東西には７棟の住棟が並ぶ、これは当初案では８棟並ぶはずであった。しかし、1929年に起きた経済恐慌により計画案の縮小を余儀なくされ、７棟となった。もう１棟入るべき敷地(ジードリングの北西側)は公園となった。２棟おきに車道が建設された。それ以外は歩道で、車道と歩道の分離を行った。また敷地の北東側には９棟の４階建て集合住宅が並ぶ。これは当初は経済恐慌により建設が行われず、戦後の1955-57年になってやっと建設されたものである。224戸は公務員宿舎として建設された。168戸はノイエハイマト(Neue Heimat)が建設した社会住宅(Sozialwohnung)である。ノイエ・ハイマートとは第２次世界大戦後ハンブルグに本社を持った巨大集合住宅を建設する会社で、エルンスト・マイはアフリカでの亡命生活を終えドイツに戻ると1954年にこの会社の設計部長に就任している。したがって、ヴェストハウゼンの４階建て住棟の設計にも関与したことは十分に想像される。４階建集合住宅を写真４，写真５に示す。1955年

写真４　1955～57年に建設された４階建集合住宅

写真５　1955～57年に建設された４階建集合住宅

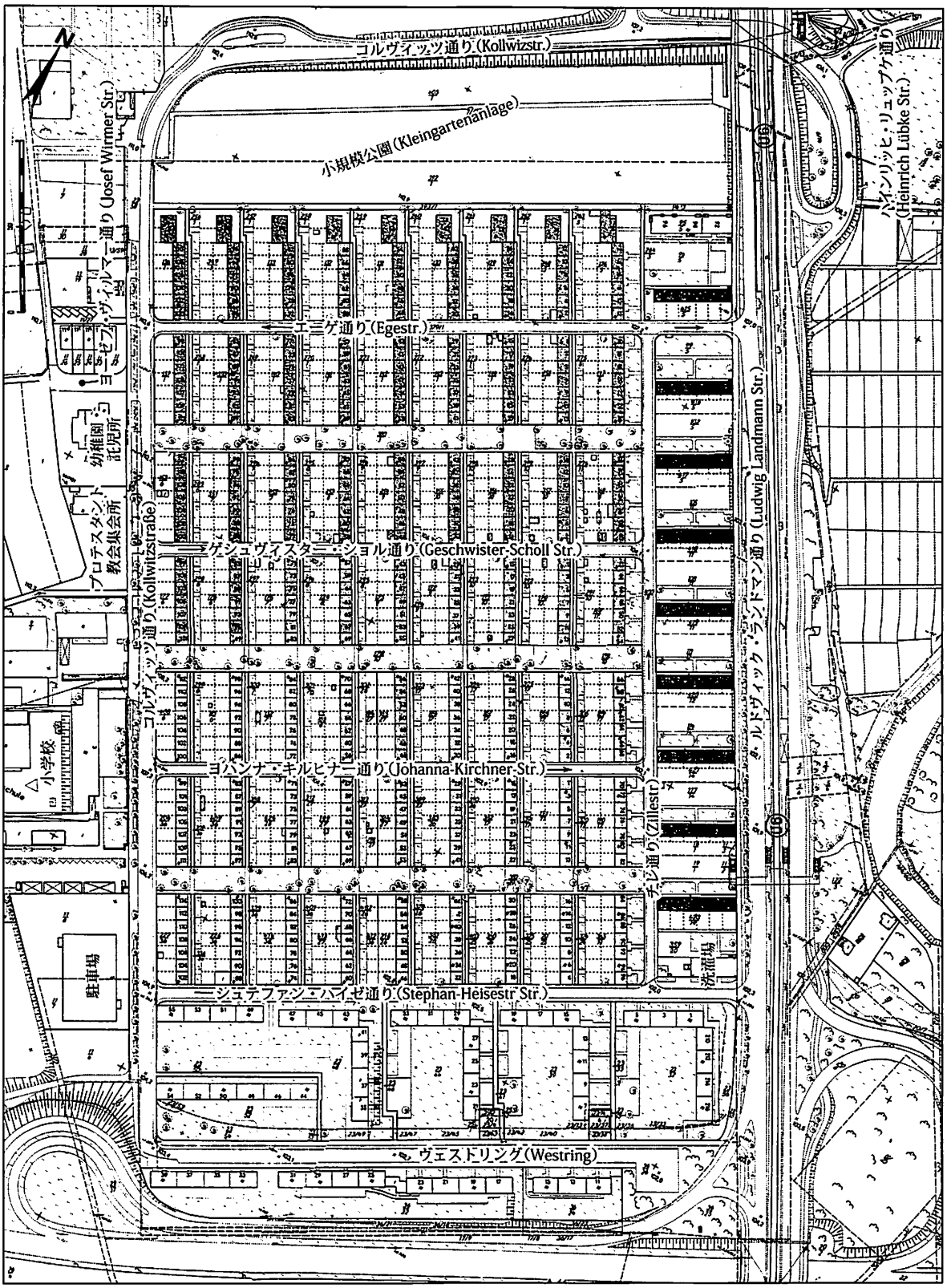

図2　ヴェストハウゼンジードルング敷地配置図[5)]

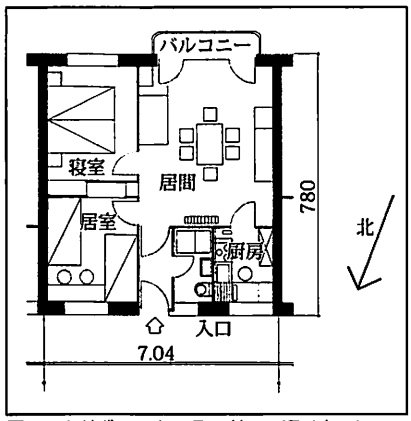

図3　ルドヴィック・ランドマン通り(Ludwig Landmann Str.)に面する住棟1戸の平面図[5)]

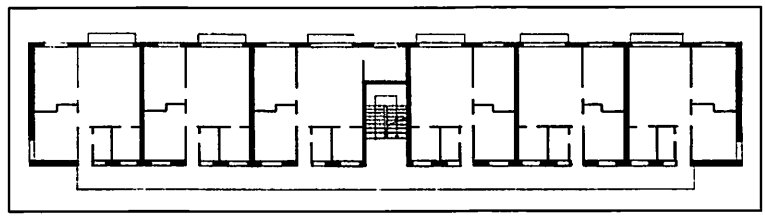

図4　ルドヴィック・ランドマン通り(Ludwig Lansmann Str.)に面する住棟平面図[5)]

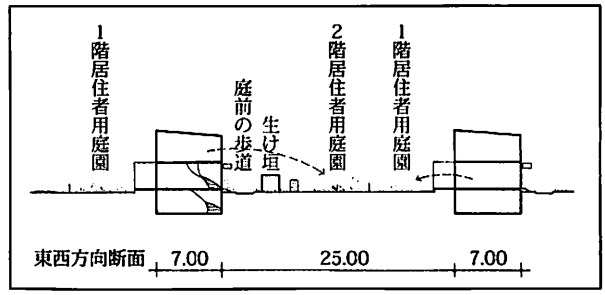

図5　ジードルング2階建住棟の断面図[5)]

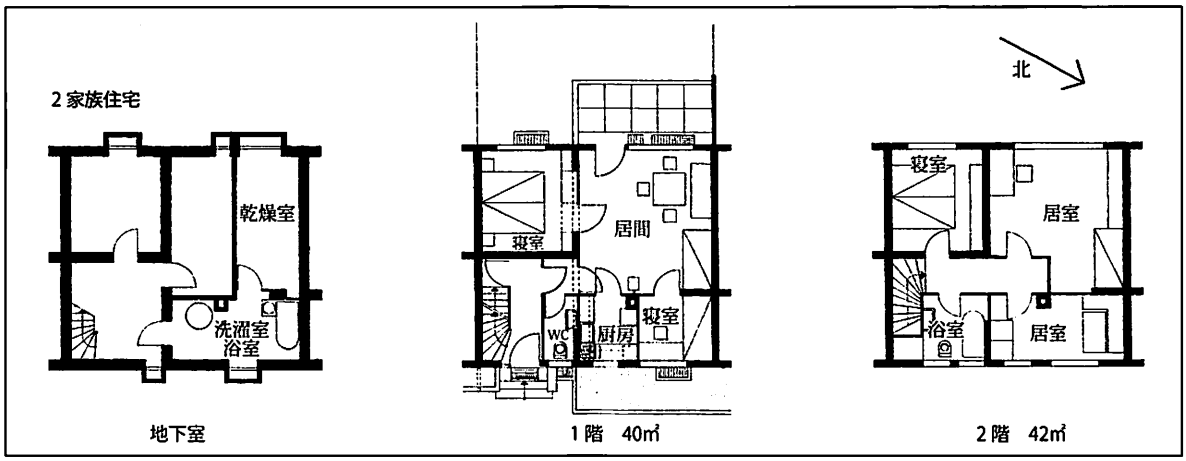

図6　2階建住棟の平面図[5)]

建設の住棟であるが我が国で最近建設されるマンションと変わりがない。窓ガラスは今では日本でも用いられている、斜めに開いたり、押出で開くことも可能なものである。

この住棟の平面図を図3に示す。また各住戸の平面図を図4に示す。1戸の床面積は47㎡であった。

図2に示す敷地図の北西の公園に面する場所にそれまで整然と配置されてきた住棟とずらした形で建つ9棟の住宅がある。これは2家族用の住宅で少し子供の数が多い家族用のものであった。

1－2　地上2階、地下1階の集合住宅

ヴェストハウゼン(Westhausen)のジードルングでは地上2階、地下1階の集合住宅が多い。高層の住棟が並ぶジードルングに比べて圧迫感は全くなく、余裕があり、開放的な雰囲気である。住棟の断面を図5に示す。住棟の幅は7mで住棟の間隔は25mである。住棟の間には生け垣があるが、庭になっている。2階の住人は住棟の南東側の庭を使用し、1階の住人は北西側の庭を使用するようになっていた。図6に2家族住宅の平面図を示す。左の図が地下室、中央が1階(40㎡)、右が2階(42㎡)である。図5で説明したように1階と2階では別な家族

写真６　チレ通りに沿った２階建集合住宅

写真７　シュテファン・ハイゼ通りの集合住宅では大規模な改修が行われていた。

写真８　損傷の進んだ住棟の内部

写真９　住棟前に並ぶ改修に使用される建材

が住んだ。これは当初は同じ家族が住むように計画されたが、1929年に起きた経済恐慌の結果、計画を縮小せざるを得なかったのである。各戸の暖房は暖炉によって行われ、浴室はあっても洗面器の無い住戸もあった。各戸に洗濯室もなく、地下室の洗濯場を２戸共同で使用した。そのためにさらに敷地の東の隅に共同洗濯場が設けられた。従来の居住形態では住人が集い団結することはなかったし、できなかった。しかし、この共通の洗濯場が住人の井戸端会議を促し、ナチスに対する抵抗拠点を作る事になった。ナチス政権下においてもこのヴェストハウゼン(Westhausen)のジードルングではナチの国旗を破る、反ナチのビラを制作するなどの反ナチ運動が行われた。ヒトラーはフランクフルトで何回も演説を行っているが、フランクフルトを嫌い、宿泊したことはない。写真６に敷地南東のチレ通りに沿った２階建集合住宅を示す。老朽化しているので、決して美しくはないが、外付のシャッターが取り付けられている。夏の過熱対策として優れている。シュテファン・ハイゼ通りの集合住宅では省エネルギー化のため、窓枠を含む窓ガラス、外壁の外断熱など大規模な改修工事が行われていた(写真７)。改修を行っている住棟で相当に損傷が進んでいる建物内部を覗くことができた住戸もあった。タウト設計の住棟と同様に階段の勾配はかなりきつい(写真８)。こ

写真10　ヨハンナ・キルヒナー通りの住棟

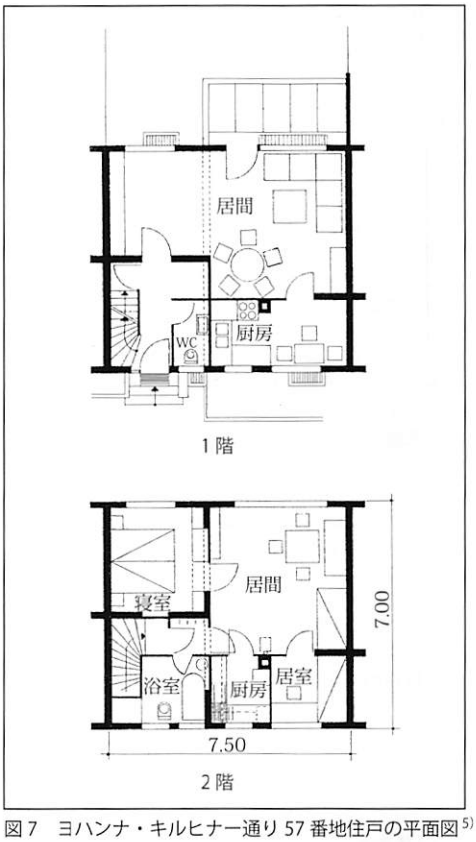

図7　ヨハンナ・キルヒナー通り57番地住戸の平面図[5)]

の写真で地下室へ降りる階段室の扉を見ることができた。改修工事を行う住棟の前には改修工事に使用する木製窓枠付き3重ガラス窓、外断熱工事に使用するロックウール等建築材料が並べられていた(写真9)。敷地中央にあるヨハンナ・キルヒナー通りの住棟を写真10に示す。第二次世界大戦中はこのジードルングも爆撃を受け、いくつかの住棟は破壊された。戦後は本来住居目的に建てられたものであったが、1階に店を構え、商売をする人、また家内工業を立ち上げる人も出てきた。また住居難であったので、住居の1室を他人に貸代する人も出てきた。現在は徐々に修復工事が行われ、歴史的遺産の継承に努力がはらわれている。しかしベルリンのタウトの残した集合住宅に比べると保存状態は良くない。

終わりに

このジードルングは1929年に建設された。しかも激しいインフレの中で、当時の労働者のために建設されたのである。一方でヒットラー率いるナチス党は着実に勢力を伸ばしていた。エルンスト・マイ始め関係者の苦労は如何ばかりのものであったろうか。マイが生まれ、愛したフランクフルトへの置き土産と言って良い作品である。戦後各国に作られた住宅団地の見本になったジードルングである。しかもマイが去ったあと、このジードルングに住んだ住人はマイに代わって反ナチスの運動をこのジードルングを拠点として行った事にマイも恐らく満足をしたであろう。

〈付録〉

エルンスト・マイの作品の名称と建設年その所在地を以下に記す。マイのジードルング視察の参考になれば幸いである。このリストは主に文献4を参照して作成したものである。

HeimatsiedlungSiedlung Breslau-Goldschmieden(Zlotniki), 1919/20
Villa May, Frankfurt am Main, 1925
Villa Elsaesser, Frankfurt am Main, 1925-1926
Siedlung Höhenblick, Frankfurt am Main, 1926-1927
Siedlung Bruchfeldstraße, Frankfurt am Main, 1926-1927
Siedlung Riederwald, Frankfurt am Main, 1926-1927
Siedlung Praunheim, Frankfurt am Main, 1926-1928
Siedlung Römerstadt, Frankfurt am Main, 1926-1928
Wohnsiedlung Bornheimer Hang, Frankfurt am Main, 1926-1930
Heimatsiedlung, Frankfurt am Main, 1927-1934
Hellerhofsiedlung, Frankfurt am Main, 1929-1932
Röderberg-Reformschule, Frankfurt am Main, 1929-1930
Siedlung Westhausen, Frankfurt am Main, 1929-1931
Anwesen Dornbusch, Frankfurt an Main, 1927-1931
Kenwood House, Nairobi, Kenia, 1937
Wohnhäuser Delamare Flats, Nairobi, Kenia 1947-1951
Haus für eine afrikanische Familie, 1945
Siedlung St. Lorenz-Süd, Lübeck, 1954-1957
Siedlung Grünhöfe, Bremerhaven, 1954-1960
Neu Altona, Hamburg, 1955-1960
Gartenstadt Vahr, Bremen, 1954-1957
Neue Vahr, Bremen, 1956-1961
Wettbewerb Umgebung Fennpfuhl, Berlin-Lichtenberg, 1956-1957

Siedlung Parkfeld, Wiesbaden, 1959-1970
Siedlung Heidberg (Braunschweig), Braunschweig, 1961-1965

〈註〉

1）ルドヴィック・ランドマン(1868～1945) 1924～1933年の間フランクフルト市長を務めた。フランクフルト市を西南ドイツにおける陸、河川、空における交通の中心とし、国際交通の拠点とした。商業都市であったフランクフルトを工業都市化した。労働者のためにエルンスト・マイの協力を得、大規模団地を造った。電力、ガスなどのエネルギー源確保を市の管轄下で行った。特にフランクフルト空港の元を作ったこと、ハンブルグ・フランクフルト・バーゼルを結ぶアオトーバーンを作ったことも大きな功績である。しかしユダヤ人であったためにヒトラー政権下ではオランダへ亡命をした。氏の住宅はマイン河の畔、Schifferstraßeにあった。氏の住宅を写真11、氏の略歴を記した銘板を写真12に示す。

2）フランクフルト厨房はウイーン出身の女性建築家グレーテ・リホツキー(Grete Lihotzky、1897～2000)により研究開発された。主婦の家事作業の時間と労力の無駄を省く事に力点を置き、家事作業と工場の労働、事務所における労働との比較を行っている。家事作業は時間制限が無いので、ついルーズに陥りがちで、時間や労力を浪費している。家事労働においても企業経営者が努力している何らかの合理化が必要であると説いている。

現在のシステムキッチンの走りとなった。文献２と３に詳しい。

写真 11　ランドマン市長が 1917 ～ 1933 年まで住んだ住宅

写真 12　ランドマン市長の略歴を示す銘板

〈参考文献〉

1．田中辰明、月刊建築仕上技術　2015年２月号Vol40, No.475で「建築家エルンスト・マイ(Ernst May)の生涯と作品その１」
2．田中辰明、月刊建築仕上技術　2015年３月号Vol40, No.476「建築家エルンスト・マイ(Ernst May)の生涯と作品、その２」
3．田中辰明、月刊建築仕上技術　2015年７月号Vol40, No.480「建築家エルンスト・マイ(Ernst May)の生涯と作品、その３」
4．Claudia Quiring, Wolfgang Voigt, Peter Cachola Schmal, Eckhard Herrel. "Ernst May 1886-1970" Prestel
5．DW Dreysse "May-Siedlungen, Architeturführer durch acht Siedlungen des neuen Frankfurt 1926-1930" Verlag der Buchhandlung Walther König
6．小倉欣一・大澤武男「都市フランクフルトの歴史」中公新書1203、
7．大澤武男「ユダヤ人最後の楽園・・ワイマール共和国の光と影」講談社現代新書
8．田中辰明・柚本玲「建築家ブルーノ・タウト-人とその時代、建築、工芸　オーム社
9．田中辰明「ブルーノ・タウト・・日本美を再発見した建築家」、中公新書2159
10．田中辰明「ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会」東海大学出版会
11．田中辰明「バウハウス(ヴァイマール)」月刊建築仕上技術2014年８月号、工文社
12．田中辰明「バウハウス(デッサウ)」月刊建築仕上技術2014年９月号、工文社
13．田中辰明「バウハウス(ベルリン)」月刊建築仕上技術2014年10月号、工文社
14．田中辰明「ナチス好みの建築」月刊建築仕上技術2014年11月号、工文社
15．田中辰明ホームページ　http://tatsut.org/